

## 茶と檳榔・その受容と変容 — 嚙み茶をめぐる —

松下 智<sup>※</sup>

### まえがき

長い間推測の域を出なかった、茶樹の原産地が、近年の中国研究者による、現地調査の結果から、その実態が明かになって来た。

その結果、茶樹の原産地は、古くから推測されて来た、雲南省南部の西双版纳傣族自治州を中心とする産地で、その範囲は、東が同省紅河哈尼族彝族自治州及び文山壮族苗族自治州、さらにその一部は、広西壮族自治区西部から広東省東北の山地にも及んでいる。西方については、ビルマの北部のカチン州山地から、インドのアッサム州山地に及んでいる。南部については、ベトナム及びラオス、さらにビルマの山地国境地帯で、目下これら諸国の調査が明かでないが、同じ地続きであって見れば、雲南省と同様と見ることが出来る。その分布はさらに、雲南省北方については、雲省高原を北上して、貴州省、四川省、湖南省、そして湖北省の境を接する。武陵山に達しており、この武陵山から長江を越えて、湖北省西北部産地の興山県に野生茶樹として、灌木型大葉種の自生が確認されている。

こうした、茶樹の分布状態は、中尾佐助代の提唱によるところの「東亜半月弧」と符合するものであり、茶樹の山地農耕文化としての歴史を物語るものであるが、雲貴高原は、茶の栽培も古く、栽培種と自生種の区別が出来かねる状態である。

一方、茶は人が造り、人が飲むものであって見れば、人間、すなわち民族とのかかわりを解明しなければならない。しかも、茶樹の自生地は、標高も500メートルから1,000メートルの産地であり、そこに住むのは、山地民族であって、その大部分が非漢族であり、現在の山地少数民族である。

山地民族とのかかわりから、雲南省南部の茶樹の原産地との関係を見ると、茶とのかかわりについては、その歴史から見ると、明かに雲貴高原北部方面、特に武陵山に製茶及び喫茶の歴史が始まっていることが明かである。

このことは、茶樹の原産地は雲南省南部の山地にあって、長い歴史と共に雲貴高原を北北して、その北端の武陵山地方の山地で、茶の文化が発生していることを示している。そして、茶樹の分布とは逆に、茶の文化が南下して、雲南省南部山地に到達しているわけで、雲南省南部地方には、茶の利用以前には、檳榔の利用のあったことが明かである。

---

※社団法人・豊茗会会長

したがって、檳榔文化圏と茶の文化圏が接触することにより、相互の文化受容と変容が、雲南省南部地方で生じており、その一つが、雲南省西双版纳傣族自治州勐海県の布朗族に見られる噛み茶の姿である。

ここに、噛み茶を通して、茶と檳榔、さらに、茶の文化、すなわち、漢文化と檳榔文化、すなわち、非漢文化との比較民族及び比較民俗的な検討を加えるものである。

## 1. 茶樹の原産地と文化の発生

茶樹の原産地

### (1) 茶樹の自生条件

茶樹の自然条件下での生育条件は、気温年平均13度C以上で、年間を通じて無霜地帯であり、雨量は年間1,500ミリ以上で、それも年間を通じて降ることが望ましい。年間10,000ミリ余も降るインドのアッサム州、チャラプンジーでは、茶樹の近縁植物は育つが、茶樹の自生は認められない。それは、このチャラプンジーでは、雨期に降雨が集中しており、乾期には数100ミリ程度となるからである。

茶樹の自生に適した条件を備える所は、それ程広くはなく、中国では南部地方に限定されており、雲南省南部、西双版纳地方がこの条件に一致する。

茶樹の自生条件としては、この他に日照条件があり、それも大葉種、中葉種、小葉種とでは、耐陰性に差があり、高木性の大葉種は、耐陰性が大きいために、照葉樹の中でも十分に生育することが出来る。それは樹姿が高木性であるが故に、周辺植物と同高の生育をすることになり、太陽光線を利用することが出来るからである。一方中、小葉種となると、周辺植物に樹上を被われ、太陽光線を十分に利用出来なくなり、生育不充分となる。特に日本や、中国東部地方に育つ小葉の低木性の茶樹では、照葉樹林下や杉・檜などの植林下では生育不可能となる。したがって、これら小葉種では、照葉樹林の周辺で一日の一定時間は、太陽光線の直射を受け得る所が最適とされる。

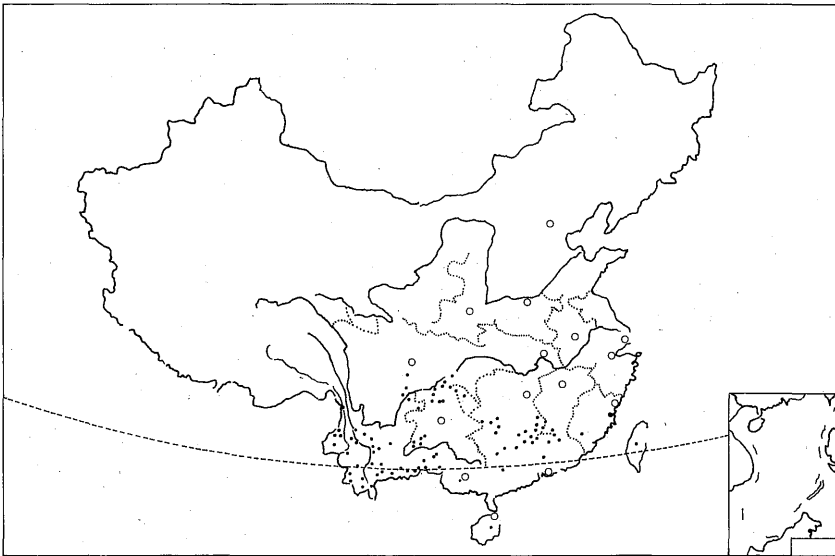
さらに、茶樹が年間を通して降雨を必要とすることから、標高も高く500~1,000メートル地帯で、夏期の冷涼な気温が雨をもたらすことになる。雨期と乾期の明かなインドのアッサム地方でも、東部山間では冬期の低温が、雨を思わせる夜露となって降雨に匹敵する水分を供給しており、大葉高木性の茶樹が、照葉樹林と共に自生生育している。

こうした、茶樹自生の条件から見ると、雲南西双版纳地方を起点としてそこには大葉種、そして東方が広西壮族自治区山地から、広東省西北部山地、ここから湖南省貴州省に中葉種から小葉種、そして、湖北省、四川省東部に小葉種となり、広く、雲貴高原一帯に分布することになる。一方西方へは、インドのアッサム州東北部山地に大葉種の自生が認められている。

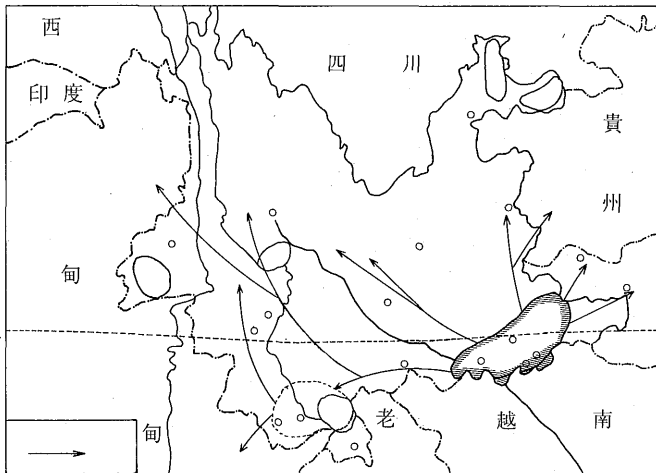
さらに、西双版纳を中心とするこれらの地方には、茶樹の近縁植物も多く、茶の原産地にふさわしい生態系となっている。

(2) 茶樹の伝播

茶樹の自然条件下での生育条件には、前述の条件が伴うが、茶樹の生育そのものには、人為が加わることにより、広く分布することが可能となる。近年では、栽培技術の向上により今迄は、茶樹の生育不可能と思われて来た様な地帯にまで分布しており、中国大陸では、山東省中部、チベット自治区東部、インドでは西部のカシミール州の南部地方にも栽培が行われている。一方東方の日本では、東北地方にまで分布することになり、日本の降雨、降雪が茶樹の生育を助長していることが認められる。このことは、日本以外でも認められ、南米のブラジル、アフリカのケニヤ、中近東のトルコ、旧ソ連のグルジア等にも茶の栽培が始められており、これら諸地域に共通することは、気温と同時に降雨量の多いことが決定条件となっている。



「中国茶葉」1989. 2期



「中国茶葉」1986. 5期

## 喫茶の始まりと伝播

### (1) 喫茶の起源

喫茶の起源については、伝説的であって、推測の域を脱しきれないが、漢族、漢文化に基くものであり、神仙思想、仙薬思想に基ずく本草茶の発達により、触発されたものと見ることが出来る。

喫茶の始まりとされている、神農氏も伝説上の半人半獣の神であり、漢文化によって支えられており、湖南省の略々中央部地方での活躍で茶との説話が生じ、後世に伝えられているものである。これも、中国でも比較的温暖、多雨の南部地方であり、多種多様な植物の繁茂可能な地方での物語りとなっている。

このことは、茶の利用が北方漢族、漢文化によるもので、しかも採取時代からのものと推測されるわけで、漢文化の南下と共に茶の文化も南下したものと見ることが出来る。

喫茶の起源については、神話、伝説の時代に逆り、その年代など判定しにくい、さらに喫茶という行為そのものが、何を基準にしての表現なのか、ということも明かでない。茶の利用が、喫茶という液体を飲むことを基準にしているが、生の茶の葉をそのまま食べる、という行為もあったのではと推測されるわけで、食べることから飲む、という行為に移る過程があったのではないかと、と思われる。

### (2) 漢代の喫茶

神話、伝説の時代から、漢代に入ると文字としての喫茶事情が表われる様になり、初原的喫茶法の片鱗がうかがえる。漢代の『僮約』には、成都から南の武陽まで、茶を買い求めに出かけており、当時四川省の成都地方に飲まれていた「苦茶」すなわち「にがな」と同様な苦い飲みものとして、薬用的に飲まれていたものである。

この「苦茶」は、中国の大陸では四川省以北の地で茶以前の飲みものとなっていたものであり、茶の普及につれて、その存在はわずかなものになったが、現代でも、四川省郊外には商品化されている。

漢代から三国時代になると、茶の利用が明確になってくるわけで、『広雑』<sup>1)</sup>に見る製茶法から喫茶法については、現在の日本の抹茶製法の原形と見ることが出来る。さらに、同時代の『華陽国志』<sup>2)</sup>には、主として中国の西南諸地方の一部、特に四川省南部地方での茶の記録が明かである。ただし、ここには、茶の産出というだけで、その製法や飲み方は明示されていない。

### (3) 唐・宋代の喫茶

唐代になると、茶のバイブルとまでいわれる『茶経』<sup>3)</sup>が陸羽により著されるが、これによって唐代以前の茶に関することが、略々判明することになる。『茶経』にも前述の『広雅』による製茶法、喫茶法が最も具体的であり、真憑性をもっていることが判明する。

『茶経』の著者である陸羽は、湖北省の略々中央に当る「天門県」で育ち、この地で茶に関する情報を入手し、その後江南に逃れてから著したものであり、湖北省の西北部地方特に、長江の中流域の巴蜀から、武陵山地方の記録が中心となっている。『茶経』の冒頭に書かれている「茶は南方の嘉木にして、巴峡川…」とある巴と峡川は、長江の三大峡谷瞿塘峡、巫峡、西陵峡であ

り、この地方の山地に大茶樹の存在を物語っているものである。

現在の巴の地には、二人抱合の様な大茶樹は存在しないが、南方の雲南省方面には、実在するわけで、陸羽の南方の嘉木がそれを物語っているのではないかと推測される。

唐代に雲南省の南部地方のことを記録したものに『蛮書』<sup>4)</sup>があるが、これには、茶のこととしては、野生の茶を利用して、茶の栽培には至っておらず、それも、現在の「景東県」辺りの記録であって「西双版纳」についての記載は無い。

宋代は、茶の受容も中国全土に広まり、茶の産地も著しく発展しており、長江沿いの各省山間地には、大部分が茶の産地となっており、日本茶もこの頃「栄西禪師」により招来されており、当時の製茶法であった蒸し製法が伝えられ、現在に至っている。

中国に於ても、武陵山を中心とする、湖北省、湖南省、特に湖南省が大きな茶産地となっていたわけで、陸羽の『茶経』以来この地方が、製茶、喫茶の発祥地であることを物語っている。

#### (4) 元・明・清代の喫茶

漢文化の南進は、元代に著しいものがあり、ことに雲南の茶業開発に於ては、元代・明代になって、西双版纳方面の開発がなされ、「普洱茶」の名声も広く行き渡ることになる。

製茶法をはじめ、喫茶法もこの時期に大きく転換され、茶の葉にお湯を注いで飲むこともこの頃からのものである。したがって、茶器の類も煎じて飲む器から、現在の様な「急須」になり、酒器や文房具との混用、合体もあり、それが、日本の「煎茶」として伝来している。このことは、明代末に来日した、「隠元禪師」の時代によるものが多く「隠元禪師」の来日の前後に於ける、日本と華南地方の交流の大きかったことを物語っている<sup>5)</sup>。

茶の文化が、漢文化と共に華北、華中、そして華南へと南下しており、それぞれの地方に固有の文化を形成しているわけで、今後の比較民俗学的な研究が期待されることである。

日本茶の伝来も、その延長線上にあるわけで、中国茶を原形とするのが、日本茶といえるが、日本に適した栽培法、喫茶法へと工夫改良されて現在に至っていることも事実である。

#### 原初製茶法とその伝播

##### (1) 中国の製茶史略

茶樹の生葉は、何らかの方法で手を加えないことには、全くといえる程にその利用価値は生じない。その加工法には、太陽光線に晒して乾燥するか、たき火などで焙って乾燥する、初原的な方法から、蒸すか、釜で炒る、さらに、醗酵する等の方法があるが、何れにしても、生の茶の葉を乾燥貯蔵するのが目的である。生の葉をそのまま貯蔵する方法もあるが、これは、茶の加工方法としては、特異な方法であって、漢文化から生じたものではない。

茶葉の加工法は、漢文化によるところの神仙思想、仙薬思想からの発想であり、漢方薬的な処方からのものと見ることが出来る。したがって、原初的な方法としては「日干し法」であり、次いで「煮る」か「焼く」方法になる。

中国の茶史上に、明確に製茶法を記録したものは、三国時代の『広雅』であり、それには、若い茶の芽を摘んで、それを蒸してから、餅状に搗いて、小さな団子にしてから、これを扁平にし、

串にさして乾燥する。この方法が、宋代になると、蒸した茶の葉を、そのまま乾燥しており、これが、日本の抹茶製法の原形となっている。その後、元代以降蒸す茶から、「釜炒り法」に変わり、以来中国の製茶法の総てが、この方法に替っている。これは茶を造ることの出来る釜が中国では、何処の家庭にあるわけで、茶が何処の家庭でも造れる様になったことを示しているわけである。

中国における蒸し製の方法は、現在、湖北省の西北「当陽県」と同省西部の「恩施県」に伝わるのみである。

次いで明代になると、釜で炒った茶の葉を揉捻しながら乾燥する方法になり、現在に至っている。揉捻することによって、茶の葉の組織が破戒され、お湯に浸すだけで、茶の内容成分が浸出して、短時間で茶の成分を味わうことが出来ることになる。

さらに、明代から清代にかけて、生の茶の葉を「日干し」してから「釜炒り」、「揉捻」する茶が分化し、これが、「烏竜茶」であり「紅茶」となったものである。

## (2) 製茶の発祥地

自生の茶樹が、雲南省南部から、貴高原を北上して、その北端が「巴蜀」から「武陵山」に至っており、この地方に茶の利用、すなわち、製茶及び喫茶が始っていることは、中国の茶史が物語っている。

神農代による、湖南省東部の「茶陵」にはじまり、陸羽の『茶経』、さらに、そこに引用されている『広雅』、後世における、巴蜀の茶産地、湖南省の茶業史等を見る時、北方からの漢分化としての仙薬思想、本草思想が、茶樹の自生地北端の地、武陵山、さらに、巴蜀の地に波及し、茶樹の利用が始ったものと思える。そして、この地から西は、四川省、東は長江沿いに江南地方へ、さらに、南は雲貴高原を漢分化、漢族及び山地民族と共に南下して、茶樹の原産地である、西双版纳地方に達し、その後、ベトナム、ラオス、タイ、ミャンマーと各国の山地に及んでいる。

## (3) 原初製茶民族

茶は、人によって造られ、人によって飲まれるものであり、そこには、人工が不可欠である。一方、茶樹はもともと山地を自生の地としており、原初製茶民族は、山地民族と見ることが出来る。

原初製茶民族の条件として、先ず考えられるのが、茶樹の自生地である所の、標高500~1,000メートルの地域に住んでいること。そして、山地生活に適応性をもっている民族であること。その一つに、薬草の知識の豊富なこと。さらに、茶に関して歴史的にも、製茶、喫茶あるいは、茶の儀礼等と広範にわたって茶との関係の深い民族であること。等々が考えられる。

こうした条件を備えた民族が、巴蜀の地あるいは、武陵山に住んでいたものが問題である。

現在の巴蜀及び武陵山地方には、「土家族」<sup>6)</sup>をはじめ、「瑶族」<sup>7)</sup>、「苗族」<sup>8)</sup>、少数ながら「壮族」<sup>9)</sup>などが住んでおり、かつて明代頃までは、「五溪蛮」、「武陵蛮」、あるいは「長沙蛮」、「梅山蛮」等々漢代以降多種多様な呼称のあった「瑶族」、「苗族」が中心となっていた様である。

茶に関しては、「瑶族」が最も深い関係をもっており、武陵山をはじめ、広東省の南嶺山地、広西壮族自治区の大瑶山地域、十万大山地域、さらに、百色県地区の凌云県、巴馬瑶族自治县、都安瑶族自治县。貴州省の荔波県、雲南省の西双版纳勐腊県、その東部、紅河哈尼族彝族自治县、

文山苗族壮族自治県。ベトナム、タイ等々各地の瑤族には、他の民族には見られない程の茶とのかかわりをもっている。

この様子は、前述の原初製茶民族の条件と完全に一致するわけで、瑤族をもって、原初製茶民族ということが出来る。

現在、瑤族の住む各省の民族を見ると、広西壮族自治区の壮族は、主として稲作民族で伝統的に製茶に無関係であり、喫茶の習慣も無く、茶より檳榔と深い関係にある。壮族以外に苗、侗<sup>10)</sup>、仡佬<sup>11)</sup>、毛難、回、京、彝、水の各族が住んでいるが、瑤族に次いで茶との関係の深いのが、侗族である。侗族については、山間地で瑤族と早くから交流があり、茶の利用を早くから体得したものと見ることが出来る。それは、侗族の族源は、平地稲作民族である僚族になるからであり、稲作を主体として、山間地の利用を従としており、山地利用については、比較的勝れたものをもっていると考える。その他の民族については、伝統的に茶とのかかわりを見ることは出来ない。

雲南省については、哈尼族<sup>12)</sup>、愛尼族、彝族等に製茶、喫茶が見られるが、これらは、雲南省に移住する前に、四川省方面に於ける喫茶習俗を体得したものであって、民族としての族源は、チベット系であり、茶樹の育つ地域で無かったはずである。雲南省の土着民族としての基諾族<sup>13)</sup>は、製茶には大変造詣が深く、その歴史は「諸葛孔明」からの伝播といわれており、基諾族にとっては「諸葛孔明」は、茶の神ともなっておる。西双版纳の主要民族である僚族も、伝統的には平地稲作民族であって、山地の茶には深いかかわりは無かったのが、近年に於ける茶の経済的価値から、水田から山地にかけての丘陵地帯に茶の栽培を始めている。

他にモンクメール語族として、拉祜族<sup>14)</sup>、布朗族<sup>15)</sup>、德昂族<sup>16)</sup>、佯族<sup>17)</sup>等が居り、ことに德昂族は、雲南省では、古くから茶の栽培を行っており、ビルマではパラウン族と呼ばれており、茶とは深いかかわりをもっている。これら、モンクメール語族も、雲南に来てから、茶とのかかわりをもつ様になったのではないかと推測される。

こうして各民族と比較して見ると、早くから漢族とのかかわりをもった、山地民族である「瑤族」が原初製茶民族ではないかと推測される。しかし、雲南省にあっては、瑤族より早くに、彝族、哈尼族等のチベット系諸民族が来ており、彼等が四川省方面から茶の利用方を伝えていることが考えられる。それが、蛮書などに現われる茶であって、製茶方など明かではないが、茶を利用していることは明かである。

瑤族が雲南省に到達するのは、明代頃からといわれており、西双版纳での茶業の発展には、大きな貢献が推測されるが、雲南省の茶史に於ては、哈尼族等チベット系諸族の方が先駆者となっているのではないかと、とも思われる。しかし、雲南省の昆明地方には、かつて、湖南省の「楚」の国との深いかかわりをもった国もあったわけで、現在の「楚雄県」の茶史を見ることによって、雲南の茶史を見治すことになるかも知れないと、考える。

## 2. 檳榔の利用と効用

### 檳榔の植物学的特性

#### (1) 檳榔樹の生態

檳榔樹は、ヤシ科 (Palmae) のアレカヤシ (Areca Catechu Linn.) の植物で、東南アジアのマレー半島のペナン地方が原産地とされており、ペナンはマレー語のビンロウジの意味である。生育条件は、茶樹より南に育ち、16～36度Cの範囲を適地とするが、雨量は茶樹と変わらず1,500～600ミリ以上が適当である<sup>18)</sup>。

したがって、生育範囲は分布が、中国南方の広東省、雲南省、広西壮族自治区、海南省、台湾省、それに福建省の一部、この一帯を北限として、南方から太平洋諸島諸国、さらに、インド、スリランカ等西南アジア諸国にも及んでいる。生育範囲の標高は、茶樹より低地であって、200～300メートル程の高地が一般的に限界となっている。自然生育条件から見ると、中国大陸の南部と東南アジア山地で、茶樹との境界となっているが、標高差で住み分けがある。

#### (2) 檳榔樹の形態

樹姿は、20メートルにも達する高木となり、頂上に細長い葉をつけており、幹は直径10センチ内外の細長い樹木である。頂上の葉のつけ根の一部に、雌花を基部に雄花を先端にして開花し、種子は5～6センチメートルで、紡垂形をしており、熟すると橙黄色になる<sup>19)</sup>。この種子と貝ガラ、または石灰と混ぜ、コショウの葉に包んで噛むのが、南方各地の習俗であり。茶と同じ様な役割を果している。

茶樹との特性比較、第一表、分布に関して第三図とする。これから見ると、茶樹と檳榔には、生育の自然条件からして、茶圏と檳榔圏が成り立つわけで、この両圏が利用面に於ても、歴史的に分化圏を形成しており、それが、中国南部山間地から、東南アジア(ベトナム・ラオス・タイ・ミャンマー等)諸国の山間地に於て接点となっており、文化接触をしている。すなわち、漢文化圏と非漢文化圏の接点となっているわけである。

### 檳榔の利用史略

#### (1) 華北の檳榔

「吳人(南方人)の鬼(疫病神)よ。ちっぽけな帽子に矩い衣装をつけ、阿儂・阿傍と妙な方言をつかい、まこもやひえを飯に炊き、漿の代りに茗飲だ。じゅんさいの汁をすすり、蟹の玉子をせせり、手にはにくずくをもち、口には檳榔(今日でも東南アジア一円でも好まれている)を噛み、中国に来ているのに、故郷を忘れかねている。さっさと立ち上って、お前の円陽(江蘇省揚州に属す)へ帰れ。…この『洛陽伽藍記』の伝える逸話は、南北両食の特長を如実に伝えている。」<sup>20)</sup>

『洛陽伽藍記』の舞台になった、「洛陽」には当然ながら檳榔樹は育たないが、南方の江蘇省の揚州辺りに、5～6世紀頃に檳榔が育っていた否かは明かでないが、中国の南方に育っていたことは間違いない。そして、その実を噛む習俗のあったことも、推測出来るわけで、中国南部では、茶の普及した当時すでに、檳榔の利用があったことを物語っている。揚州地方における檳榔



については、「鑑真和上が秘方に用いた生薬類は、沈香・人参、…檳榔子・香附子・甘草・桔梗・古茶などであると唐招提寺に伝えられており…」<sup>21)</sup>揚州地方での檳榔の生育は定かでないが、薬用としても利用されていたことが明かである。

檳榔子の利用については、中国に限らず、日本でも古くから、お歯黒や入墨にも使われており、<sup>22)23)</sup> これらも、日本に育たない檳榔樹であってみれば、古くから交易の商品として取扱われていたものである。

## (2) 華南の檳榔

華南には、檳榔も自生しており、前記の江蘇省揚州地方での檳榔子も、華南地方からの移入であったことも、容易に推測される。

華南地方の檳榔については、『南方草木状』<sup>24)</sup>に「…バナナの他甘藷・薊醬・諸蔗・蕪菁・茄・雍・や檳榔・荔子・椰子…」<sup>25)</sup>とあり、現在でも利用されているものが多い。しかし、檳榔子の利用については、現在の華南地方には多く見られないが、広東省の広州市内や、台湾省の台北郊外には、露店などで販売しているのを見かけることが出来る。

W・エバーハルト『古代中国の地方文化』<sup>26)</sup>には、檳榔子について「南方の人びとは皆檳榔子をかむ。彼らはなかが三つに分かれた銀か錫の箱をもち、そのなかには檳榔と必要な石灰と包むための木の葉が入っている。ちょうどほかの地域で人びとが茶を飲むのと同じように、広東と広西では檳榔子をかむが、これには酒のような刺激がある。…檳榔をかむ風習は華南のすべての諸民族の間の一般的な風習であったことになる。」とあり、檳榔に関する広範な利用の記載がある。

さらに、台湾に於ける檳榔については、『台湾の原住民族』<sup>27)</sup>に「…部落に入ると、各戸の庭に植えられた檳榔の木が空に立ち、たくさんの実をつけている。檳榔の実は、割って、「ピラ」と称する草の葉と石灰を少し交ぜて、歯でかむ。檳榔の実をかむ風習を持つのは、高砂族の間ではパンクツァハ族の他パイワン族、ルカイ族、ヤミ族、平捕族の一部と南部に住む漢民族の一部で、さらに広く南島の諸民族に広がっていて、生活になくてはならないものようである。」華南地方に於ける檳榔子の利用については、北方の漢族と漢文化との接点になっており、比較民族及び比較民俗的にも検討を要することが多いのではないかと思われる。

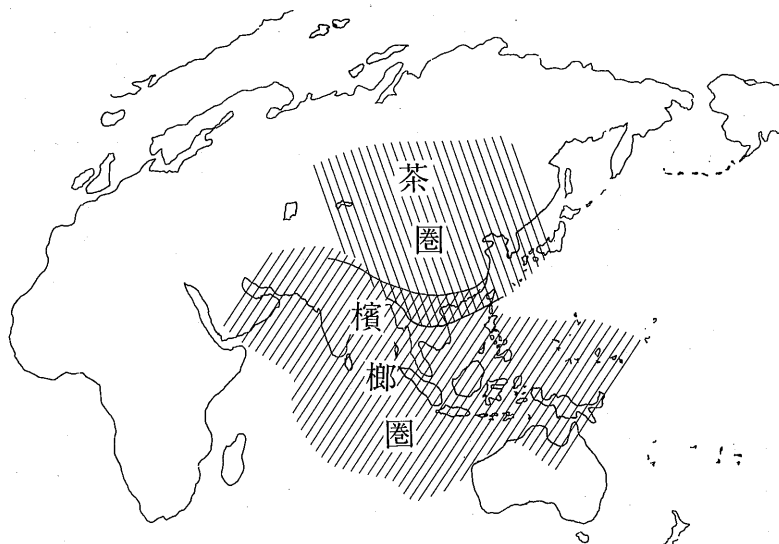
## (3) 西南地方の檳榔

中国の西南地方には、その低地に檳榔の生育地もあり、『蛮書』<sup>28)</sup>には、「荔枝、檳榔、訶黎勒、椰子、檳榔等諸樹、氷昌、麗水、長傍、金山並有之」。とあり、雲南省の西部に育つことを物語っている。さらに同書の校注をしている「向達」は『太平御覧』巻972の南夷志、及び同971の雲南記、さらに宋代の「周去非」の『嶺外代答』巻8など引用して、雲南省、四川省の檳榔をとりあげている。

雲南省南部、現在の紅河哈尼族彝族自治州の元江県には、『元江府志稿』<sup>29)</sup>に茶と共に檳榔が特産となっており、この地方に住む「傣族」に好んで噛まれていたことが著されている。元江県には、現在(1991年)でもその名残りがあり、檳榔樹が20本程民家の庭先に育っている。ただし、現在は、檳榔を噛む人は極めて少なく、傣族の老人にまれに見ることが出来る、ということである。

第1表 茶と檳榔特性比較

	茶 樹	檳 榔 樹
生育標高	1,500~2,000m 高地	500~1,000m 低地
生育温度	5~20℃, 亜熱帯~温帯	16~40℃, 熱帯~亜熱帯
雨 量	1,500mm 内外, 温暖, 冷涼	1,500mm 内外, 温暖, 湿潤
土 室	弱酸性	選ばず
地質的分布	東アジア, 西南アジア, 東南アジア, 全世界	華南, 東南アジア, 太平洋諸国 西南アジア
利用民族	アジア山地, 平野各民族広範囲	華南平地民族, 東南アジア, 西南ア ジア各民族, 太平洋諸国民族
利用部分	芽, 葉	果実=種子
効用成分	喉の渇き, 消化, 解毒, タンニン カフェイン	喉の渇き, 消化, 解毒, タンニン カフェイン
使 い 方	生食, 乾燥, 飲む, 日常生活, 食前・後, お湯浸出, 単用, 混用, もてなし, 儀礼	生食, 乾燥, 噛む, 日常生活, 混用, もてなし, 儀礼, 食前・後
使 う 人	大人, 男女, 小人 (少ない)	大人, 女子, 男子, 小人 (少ない)
長 所	年間利用可能, 単品利用, 多人数でも可, お湯を必要とする, 加工必要	加工不要, お湯不要, 個人で楽しむ
短 所	加工を必要とする, 施設・設備お湯を必要 とする, 器を必要とする	混用を要する (石灰, ギンマの葉) 不潔感あり



第3図 茶と檳榔の分布略図

雲南省における、明代、清代の六茶山の中心であった、現在の西双版纳傣族自治州勐腊県易武について『鎮越県志』全<sup>30)</sup>には、民俗の飲食の項に…「徭人・阿卡、本人…夷族多喜食酸辣之味燹人飲後嚼檳榔和以兒茶…」とあり、この地方に住む燹人（現在の辣族）に檳榔を噛む習慣のあったことを示している。さらに『寧洱縣輿圖』<sup>31)</sup>の普洱府志卷8の物産にも茶と共に、檳榔の習俗があり、雲南省南部地方には、各地に茶と檳榔が産出、利用されており、高地での茶と低地での檳榔の生育を物語っている。現在でも同地方には、老人の間には檳榔を噛む習慣があり、各地の路上に赤い唾液が吐き散らされているのを見ることが出来る。しかもこの習慣は西双版纳地方の民族には共通した習慣の様であるが、哈尼族、布朗族には顕著の様である。

#### (4) 東南アジアの檳榔

東南アジア各国には、山地、平地、さらに島国、大陸を問わず、檳榔の習慣があり、『佛領印度支那』<sup>32)</sup>、『印度支那民族誌』<sup>33)</sup>などに各民族の習慣として取りあげられている。『南方文化講座』<sup>34)</sup>には仏印の民族として「…特殊な風習としては好んで檳榔の實を噛む。檳榔樹の實をきんまの葉で包んで噛むのであるが唾液はために眞赤となり、吐いたあとをみると何物かを聯想して気色の悪いこと夥しい。都会人には殆ど見られぬが、農村に於ては涅齒の俗が普及している。これにより菌が消滅し、齒が丈夫になると信じられている。」とあり、檳榔の効用、変遷の一部を物語っている。

東南アジア各国の檳榔の習俗については、中国の『小方壺齋輿地叢書』<sup>35)</sup>中の『暹羅志』をはじめ『安南小志』、『南越筆記』等各書に記録されており、茶より檳榔の習慣の多いことがうかがえる。茶より檳榔の習慣が主となっているのは、東南アジアの島嶼部であり、『南太平洋の民族と文化』<sup>36)</sup>、『セレベス民俗誌』<sup>37)</sup>、『比律賓』65卷<sup>38)</sup>、『蘭領東印度』第2卷<sup>39)</sup>等々、茶の習俗より檳榔の習俗の多いことを示している。このことは、これら島嶼部各国には、茶樹の生育、栽培が伝統的にみられないこと、さらに、漢族、漢文化の直接的影響の無い地域ではないか、と見ることが出来る。それは、東南アジア各国には漢文化、すなわち「華僑」が定住し、茶の習慣が持ち込まれる様になってから、各地に喫茶の習慣が普及することになるが、現在でも、喫茶の習慣は華僑社会を中心としていることから明かである。したがって、東南アジアの島嶼部各国には、伝統的な嗜好料として、檳榔を噛む習慣があり、同じ東南アジアでも陸地部における各国には、漢族、漢文化の影響が直接伝っており、喫茶の習慣も伝承され、檳榔の習慣との接点となっているわけである。

#### (5) アッサム地域の檳榔

漢文化の影響のより少ない、インド、ベンガル、ヒマラヤ山地等には、檳榔を噛む習慣は喫茶の習慣よりはるかに濃厚である。

アッサム平地のアホーム族、アッサム人、ベンガル人等には、現在は喫茶の習慣として、紅茶があるが、古来の伝統文化としては檳榔文化である。アッサム周辺山地の民族についても、檳榔文化が主体となっており、カシー丘のシロン一帯に住む「カシー族」にあっては、喫茶の習俗は殆ど見ることが出来ないが、日常生活に不可欠なものが、檳榔であり、ことに女性にとっては、

一時も口から檳榔がはなれないといえる程である。

同じアッサム山地の民族でも、ナガランドのナガ族には、漢文化の影響が強く、喫茶の習慣もあり、初原的な製茶法ながら、野生茶の葉を加工しており、檳榔の習慣は殆ど見られない。

アッサム北部のヒマラヤ山地のネツファ（現在はアルナチャール・プラデッシュ）に住む、ダフラ族、アパタニ族等チベット系の民族には、チベット茶の習慣が伝わっているが、自然水だけの民族も多い。嗜好飲料としては、酒が主体となっており、雑穀をはじめ、筍子からの酒もある。

ヒラマヤ山中のブータンにも、チベット茶の習俗が見られるが、伝統的には檳榔であり、ブータンの市場の様子について、佐野賢治氏<sup>40</sup>は「…いちばん目につく売り物はドマ（ピンロウ）で、石灰をまぜて噛（か）むものである。かつてたばこをのむ習慣のなかったこの国では、ドマが大事な嗜好品。だれもが口を動かしながら、ときどき赤いつば（だ液）を吐き出す。…ピンロウを噛む習慣は、東南アジア一帯におこなわれ、ブータンがチベット文化圏に属しながら、東南アジア文化とのつながりを示す一例となっている。」

さらに、アッサム南部山地の諸民族にも、檳榔の習慣はあっても、喫茶の習慣は見られない。これも、漢文化の影響は無いが、東南アジア、さらに、インド文化がより強く影響しており、茶より檳榔となっているものと推測する。

現在は、アッサムの紅茶産業の発展に伴って、周辺山地の民族にも、平地の茶園労働者となっている者もあり、彼等のもたらす喫茶の習慣が、山地民族にも伝えられている様だが、檳榔の習慣は根強く継承されている様である。

#### 檳榔の成分と効用

##### (1) 檳榔の薬効

檳榔の実には、「アルカロイド0.3~0.7%、アレコリン（約7.5%）アレカイジン、グアバコリンゲバシンなど。その他タンニン約15%、脂肪油14~18%、ラウリック・アシド（約50%）マイリスティック・アシド（約20%）、オレイック・アシド（0.25%）、パルミック・アシド、ステアリック・アシド、カプリック・アシドなどを含有する」<sup>41</sup>含有成分としては、茶に含まれる成分と共通するものが含まれており、したがって、茶と同じ様な効用をもたらししている。「檳榔はうっ滞を散らし、瀉下、殺虫作用のある薬物である。黄宮綉は「その味苦であり降を主とす。堅を破り、脹を消し、食を化し、痰を行らし、水を下し、気を降し、虫を殺し、便を開く」といっている。…」<sup>42</sup>といった薬効が認められており、「健胃、消化、収斂、駆虫薬として、脚気、腫脹、消化不良、便秘、條虫駆除などに応用する。また臭気水素酸アレコリンの原料として縮瞳、眼底血圧降下薬とする。」<sup>43</sup>等の効用をもっており、茶の効用と大変よく似た作用を果している。

さらに、檳榔を噛む時には、キンマ（コショウ科（Piperaceae）の植物の葉で石灰と共に檳榔の実を包んであり、このキンマの葉に含まれる成分も加わって、「これを噛むと呼吸を爽やかにし、口中を清潔にして口臭を除き、声をよくするなどの効があるとされているが、シーレ好きの男女の口のなかは赤く、一種の悪臭があり、眞赤はつばを路上に吐き散らす癖があって、あまり上品なものではない。」<sup>44</sup>

こうした多くの効用・作用は茶のものそれと大変近く、茶樹の育たなかった熱帯地方の人々に自然発生的に利用される様になったものと推測される。中国大陸で多くの植物の中から茶の葉の利用が始まったと同様に、熱帯に育つヤシの木に成る実が、利用され、それが長い歴史と共に伝統的な嗜好料として、噛み続けられて来たものである。

檳榔子の成分が身体的に多くの効用をもたらし、熱帯地方の人間生活にとって欠くことの出来ないものになったわけで、生活必需品ということから、日常生活の各種儀礼にも取り入れられている。農耕儀礼をはじめ、婚姻儀礼、さらに、物々交換の品となり、価格的な効用をも持っている。

成分、効用としては、茶と檳榔は共通点が多いが、植物学的には全く異なるわけで、そのうえ、茶は漢文化によって育てているのに對し、檳榔は南方の非漢文化によって育ったもので、それぞれの地理的条件、さらに、宗教、人種、民族、生活文化等々異なるものが、中国大陸の南部地域で相接触し、互に変容しつつある。そうした地域に見られる、茶の変容の一つが噛み茶に見られるわけである。

### 3. 茶と檳榔の接触

#### 雲南省南部地域

##### (1) 雲南の茶と民族

雲南省は、四川省から見ると、雲に被われた南方の地であったわけで、その開発も四川省に比べると、大変遅れている様である<sup>45)</sup>。

雲南省の茶についても、それが歴史上に登場するのは、唐代の『蛮書』<sup>46)</sup>が初見ではないかと思う。唐代の中国は、現在の省都「昆明」の西方「大理」に栄えた「南詔王国」が中心となっており、雲南省南部の茶についても、現在の「景東県」辺りのことであり、南詔王国の行政も、この辺りが限界ではなかったと思う。「茶出銀生城界諸山，散収無採造法。蒙舍蠻以椒薑桂和烹而飲之。」とあり、景東県（銀生城）地方の山地の茶を摘んで、造っているが、茶畑とはなっていない様である。そして、この地方の人とは、お茶を飲む時にコショウ、ショウガ、ニッケイ、などを入れて茶と共に煮て飲んでいた様である。

この時の製茶法が明かでないが、飲み方としては、湖北省や湖南省方面の古い喫茶法であり、現在の「擂茶」<sup>47)</sup>「油茶」<sup>48)</sup>に通ずるものである<sup>49)</sup>。

唐代に景東県まで開発されていた茶は、その後宋代、明代になると、景東の東南約300キロにある「普洱県」まで進出しており、雲南の茶を代表する「普洱茶」の発祥の地となったわけである。普洱茶は、その周辺一帯の産地から、普洱に集荷され、ここで荷造りされて各地に送られたのである。当時の茶産地の中心が、普洱県より更に東南の「西双版纳傣族自治州」東方の「ラオス人民共和国」との国境地域である「勐腊県」の六茶山であった。六茶山の中心は、現在の「易武」であり明代から清代にかけては、「鎮越県」であり、同県志には、「茶之産地，第一易武点曼撒，曼腊，曼乃、各郷鎮最適産茶…」とあり、現在の六茶山の始まりとなっている。

寧洱縣輿圖には、食品の項に「茶産普洱府邊外六大茶山…茶味優劣別之以山首數蠻磚次倚邦次易武次莽芝其地有茶王樹大數圍土人歲以牲醴祭之次漫撒次攸樂最下則平川産者名曬子茶此六大茶山…」とあり、雲南通志にある六茶山、すなわち攸樂、革登、倚邦、莽枝、蠻崙、慢撒の六ヶ所となっており、現在の六山茶と略々同一地名となっている<sup>50)</sup>。

雲南省南部の茶業開発は、明代、清代に普洱県が中心となるが、民国時代になると、普洱県南東約60キロの「思茅」に移り、ここに、前進基地としての茶業研究所や製茶工場を設け、開発指導に当たっている。さらに、この「思茅」にはローカルながら飛行場も出来て、総合的な開発体制が施されて来た。それが、1984年頃になり「思茅」から西双版纳傣族自治州西部の「勐海県」に、茶業研究所も製茶工場も移して、雲南茶業の中心的役割を果たしている。

明代に茶の産地として知られた、勐腊県の六茶山は、景洪県、勐海県、さらに思茅地区の近代的な茶業開発地区に、先を越されて、かつての産地は、野生状態にもどり、新規の開発が所々に見られるということになっており、輸送手段としての道路の開発が、茶業開発に大きく影響している様である。

## (2) 山地民族と平地民族

雲南省南部には、チベット・バーマ系の山地民族の多くが、茶の生産にかかわっているが、中国政府の近代化の一環としての茶業の開発、特に山間地住民の経済開発、ということで茶業栽培、製造が奨励されている<sup>51)</sup>。茶樹が山地に適応した特性から、茶の生産地は主として、山間に始っており、山地民族がその中心的存在であり、雲南省南部の山地に住む、「哈尼族」をはじめ、同系の「愛尼族」などは、西双版纳の茶造りの中心となっており、南糯山の「茶樹王」をはじめ、古老の製茶民族である<sup>52)</sup>。

モンクメール語族としての山地民族、すなわち、「布朗族」、「拉祜族」、「德昂族」、さらに「佤族」等には、いずれも茶とのかかわりが深く、ことに、布朗族にあっては、酸茶の製造が特異なものととして、広く知られている<sup>53)</sup>。布朗族の酸茶は、別名「嚙む茶」あるいは「竹筒茶」とも呼ばれており、竹筒に茶を葉を堅く詰めて、比較的湿気の多い土中に三ヶ月から六ヶ月、長いと一年余埋めておき、適当に乳酸醱酵をした後に掘り出して、嚙むまたは食べる<sup>54)</sup>。この製茶法は、現在の布朗族には、殆ど見られなくなり、専ら普通の乾燥した緑茶になっている。

布朗族の酸茶は、彼等の日常食物に多い酸味の有る食品の製法を、茶に応用したもので、茶の原初的手法ではない。布朗族の原初的な嗜好品としては、檳榔子があり、現在は老人それも、女性の中にわずかながら見られるだけで、殆どが茶になっている。前述の酸茶も、檳榔子と前後して利用されることが多く、茶への変容の名残りとも見ることが出来る。

布朗族の同系民族である、德昂族は古老の製茶民族といわれており、雲南省をはじめ、地續きのミャンマーの北シャン州、ナムサン県に住む「パラウン族」もミャンマーの代表的な製茶民族となっている。ここにも、食用の茶を造っており、落花生、小えび、若干の塩等と共に食べているが、パラウン族は造る方で、食べるのはミャンマー人が中心となっている。この他の拉祜族、佤族にも茶の利用は認められるが、茶の歴史としては古いものではない。

彼等モンクメール語族系諸民族には、伝統的な嗜好食品としては、檳榔があり、現在でも山地に住む人達には日常的であり、漢化の進んだ所に住む人達には茶となっている。その茶も、彼等の日常的に利用する竹筒が利用されており、湯カン以前の「湯沸かし」用であり、「茶碗」代りに使われている。この習俗も、哈尼族、愛哈族、さらに彝族にも認められるわけで、茶の利用が導入され、日常化している竹筒を使って、茶を造り飲むということになったもので、これらをもって原初製茶民族と見ることは出来ない。

西双版纳土着の民族といわれている「基諾族」<sup>56)</sup>も古老の製茶民族といわれているが、彼等の茶史は、「諸葛孔明」から教えられたものとされており、製茶法も現在の中国各地に伝わる「釜いり法」と変らない。さらに、基諾族にも茶以前には、檳榔子を噛んでいたもので、現在でも高年令の女性には、その習慣を見る事が出来る。

雲南省南部の平地に住む民族には、西双版纳の中心民族、「傣族」をはじめ、「壮族」が住んでおり、稲作を主体とする濃耕に従事している。傣族には、檳榔子の習俗が中心となっており、元江県に見られる様に特産植物としての檳榔があった。現在の傣族には、西双版纳勐海県に見られる様に、稲作民族ながら、水田に続く丘陵地帯に茶の植栽をして、農家経営の一環に取り入れている。しかも、彼等には、主食としての米が安定的に確保出来るため換金作物としての茶業に、力を入れ大々的な茶業開発をしており、ことに、勐海に政府としての茶業開発の中心が移ってから、急激な発展を遂げ、今では西双版纳の茶業中心的存在となっている。

雲南省東南部に集中的に住む「壮族」には、茶の生産は多くは認められず、広西壮族自治区の壮族同様、茶に関しては、傣族より更に後発的なものである。

西双版纳傣族自治州にあっては、傣族は、かつての12版纳の支配民族であり、土司として山地民族の造った茶を集め、漢族その他茶商への仲買的な役割をもっていた<sup>57)</sup>。

雲南省南部地方の茶については、唐代以来継続している。漢族、漢文化により茶の利用が触発されたもので、それが、茶樹の原産地であり、広く茶樹が自生しており、茶の利用が、山地、平地の民族を通じて、初原的なものから、近代的なものへと絶え間なく発展して来たもの、ということが出来る。

## 広西壮族自治区

### (1) 壮族の茶

広西壮族自治区は、文字通り平地には壮族が多数を占め、わずかながら京族の住む区もあり、山地には瑶族をはじめ、苗族、彝族、平地から山地にかけて、侗族をはじめ、仫佬族、毛難族、回族、水族などが住んでいる。

壮族は、平地で稲作を主体とする民族であり、茶に関しては、歴史的なかわりを見ることは出来ない。もちろん、現在は、茶業に従事する者もあり、茶の栽培、製造を農家経営の一環に取り入れている者もあるが、それは、近代化政策の一環であって、伝統的なものではない。現在の近代時茶業開発は、主として漢族によって進められており、山地にあっては、瑶族が中心となっている。

壮族と同系とされている、侗族では、稲作と同時に茶業経営、林業経営に従事しており、茶の利用に於ても、三江侗族自治県の「擂茶」の習俗も認められ、茶とのかかわりは、瑶族に次いで深いものがある。しかし、侗族の茶に関しては、その居住地が山間地であり、茶の知識も早くから瑶族から吸収していたのではないかと推測される<sup>58)</sup>。

## (2) 瑶族の茶

広西壮族自治区の瑶族についての茶は、歴史的にも、現在のにも、さらに、その利用法に於ても、他の諸民族とかけはなれた深いかかわりをもっている。

茶の産地を見ると、中国屈指の名茶として、「白毫茶」があり、広西西部の百色市の凌云県産で、伝統的に瑶族の造るものであり、近年になって、近代化政策の一環として、ここに住む壮族も造るようになった様である。次に、広西東部の大瑶山の一角、金州瑶族自治县には、幻の茶とまでいわれている、「白牛茶」が、坳族によって造られている<sup>59)</sup>。金秀瑶族自治县には、茶山瑶、盘瑶、山子瑶、花蘭瑶、等が住んでおり、名茶の白牛茶は、坳族によって造られるが、茶山瑶などは茶は造らないが、日常生活には、絶対欠かせない飲みものになっている。金秀瑶族自治县南方、桂平県には、かつて瑶族が造っていたが、現在は漢族によって造られている。「西山茶」があり、同県内の瑶族の現在する、紫荆郷には「紫荆茶」が造られており、これまた名茶の一つとされている。

景勝地、桂林の東方の賀県には、山地の盘瑶と平地の平地瑶に分かれているが、それぞれの住む地方によって、土瑶、西山瑶、東山瑶、開山瑶、そして天堂瑶と分かれている。主として茶の栽培、製造に従事しているのは、開山瑶で別名「平頭瑶」ともいわれ、名茶「開山白毛茶」を造っている。この他の瑶族においても、名茶といわれるまでにはなっていないが、自家用茶をはじめ、経済作物としての茶は、殆どの地で造られている。

賀県の北にある、富川瑶族自治县には、山地瑶として盘瑶が住んでおり、自家用の茶を造っているが、平地の土瑶には、茶造りは無いが、喫茶の習俗は毎日の生活に欠かせない。

桂林の南方約100キロにある、荔浦県の山中「蒲芦郷」には、葉草採取を生業の主体とする、山地瑶（過山瑶）の盘瑶が住んでいるが、主体の葉草は当然ながら、日常生活には茶が欠かせず、自家用としての茶造りが行なわれている。この荔浦県には、瑶族の他に、壮族、苗族、侗族、仫佬族、毛難族、京族、それにわずかながら回族、蒙古族、朝鮮族、高山族も住んでいるが、いずれも茶とのかかわりは無いが、あっても極めて少ない。

瑶族と茶のかかわりについては、茶の栽培、製造以外に喫茶習俗としても、「擂茶」の習俗が、「油茶」と共に恭城県、竜勝県、興安県等に伝承されており、油茶については、広西壮族自治区の田林県をはじめ、前記、富川県、賀県、等に分布しており、広西壮族自治区東部に、擂茶、油茶の習俗があり、同区西部には少ない。

茶と檳榔に関しては、大略すると、壮族には檳榔で、瑶族には茶、というのが、伝統的な習俗である。婚姻儀の茶については、各地の瑶族に見られるが、壮族には檳榔が主となって使われている<sup>60)61)62)</sup>。『廣西通志』巻89には「…嶺南人以檳榔代茶…」<sup>63)</sup>とあり、中国南方には、茶の利用以前に檳榔子が使われていたことが伺える。これは、中国南方の諸民族と檳榔子のかかわりを



示すものであり、茶の利用は、漢民族と漢文化によるもので、山地民族としての瑶族に早くから、漢文化が引継がれ、山地と平地との共存共栄による瑶族の発展史を推測することが出来る。

## 広東省の茶と檳榔

### (1) 広東省の茶史略

広東省は、中国にあっては、南方の玄関として早くから開かれてはいるが、茶の歴史については、近世になってからのものである。広東省の茶に関しては、主として宋代頃から明代にかけて発展しており、それも広州市の後背山地であり、主として瑶族の住む山地であった<sup>64</sup>。清代になって、広東省の開発、それに伴う漢族の進出もあってか、瑶族の移動が行なわれ、山間地の茶産地が衰退している。

最近の烏竜茶ブームによる茶業開発は、広東省でも触発され、かつての山間茶産地の再開が行なわれ、急激な発展となっている。

### (2) 茶と檳榔のかかわり

広東省北西部山地には、主として排瑶と過山瑶族が住んでおり、北隣りの湖南省南端、江华瑶族自治と共に、瑶族が集中している。江华瑶族自治県の「苦茶」、広東省の樂昌県の「白毛茶」、同省連南瑶族自治県の「黄連茶」等々名茶の産地もあり、大小様々の茶産地も多く、茶産地は形成されないが、自家用茶としては、何処の集落へ行っても、瑶族は必ず造っている。

檳榔樹については、広東省の平野に自生しており、ことに、海南省に多い。現在でも広東省の省都、広州市内にも所々に、檳榔子を売っている露店が目につくが、海南省の黎族には特に、檳榔の習俗が濃厚の様である。

『南越筆記』<sup>65</sup>、『粵遊小志』<sup>66</sup>などには、檳榔子が茶の代りをなしていることが記されており、茶の伝来以前に檳榔子の使用のあったことがうかがえる。

檳榔子が、各種儀礼特に婚姻に欠くことの出来ないものになっていたことも、茶と同様であり『新安縣志』<sup>67</sup>上巻風俗編には「婚姻必以檳榔萐葉茶果之屬日過禮府親迎昏夕即廟見…」とあり、茶より檳榔が重要視されている。新安県は、現在の深圳市西方の宝安辺りの山間であって、当時には瑶族が住んでいた様である。この山、杯渡山には「…有神茶一株能消食退暑…」とあり、茶樹を茶神木として崇めていたことが伺える。

さらに『廣寧縣志』<sup>68</sup>巻12風俗志には「邑中婚禮先通媒酌次送年度庚次納采…以檳榔酒関…小盆檳榔以言…」とあり、檳榔が主役となっており、茶は無関係となっている。連南瑶族自治県、及び広西壮族自治区の富川県瑶族自治県には、婚姻に茶は欠かすことの出来ないものとなっており、花嫁が何よりも重視するのが、祖先から長老、来客等への茶のサービスであり、これの作法の出来具合が、花嫁の評価にもなるとされている。この習俗は、福建省東部の福安県、霞浦県の山間に住む「畚族」にも見られるわけで、瑶族と畚族が同族であることを物語る一つでもある。

## 台湾省の茶と檳榔

### (1) 台湾茶史略

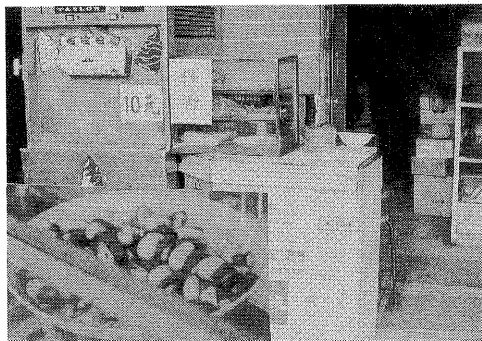
台湾省の茶は、中国大陸、それも福建省の安溪県地方からの移住によるものが多く、台湾自生

の茶もあったといわれているが、それを利用したことは祥かでない<sup>69)</sup>。したがって、製茶法、喫茶法等は福建省の泉州、厦門、さらに広東省の潮州地方の「工夫茶」の習俗で、主として「烏竜茶」が飲まれている。それに、日本統治下に開発された「台湾烏竜茶」、さらに、国民党の台湾移住による、緑茶及び花茶の生産、消費が急造しており、最近になって、「工夫茶」にさらに手を加え「茶芸」が隆盛となり、日本の茶道文化と同様に、台湾の茶道文化として、茶芸がもてはやされている。

## (2) 台湾の檳榔

台湾には、漢族の移住以前には、南方太平洋諸島からの移住民族が、先住民族として住んでおり、彼等の生活には檳榔が欠かせないものとなっている<sup>70)</sup>。台湾の原住民族については、前掲『台湾の原住民族』にあるが、檳榔の利用に関して『壺灣に於ける食檳榔の風習』<sup>71)</sup>に細部にわたる調査報告があり「壺灣に於ける此風習も文化の向上に伴ひ漸時現象する傾向にありと雖も、尚ほ、長老者間或は鄙地の住民中には、最も嗜好せられ、夏の日長、榕樹の木蔭に悠々嗜好せると眺むる時、南國の風情、一入の感なきを得ず。…」とあり台湾の先住民族には、欠かせない嗜好品となっていた様である。同書にはさらに「…起床と同時に、2～3個を、毎食時後、2～3個を、来客あれば、吾人の茶菓を薦むるに似て、客に此の食檳榔を出し、薦めつつ相共に嚙むを習慣とせり…。」こうした嗜好以外にも檳榔子が広く使われており、「…贈答物を受くる際、返禮の意味にて、大凡、10個を丁寧紙に包装し、赤色の帯封を施し以て返却す。…喧嘩争論をなしたる際、仲裁者はいりて和解となりたる時は、食檳榔を持参し、嗜好しつつ談笑せり。又婚禮に際しては、調度品中に美しく飾れる箱に入れたる食檳榔を加へ、花嫁の来客に接見するの儀禮として容器に盛りたる、食檳榔を持ち廻り客に其の1～2個を取らしたるなり…。」この他結納品としての檳榔、さらに不幸の際の香典等と、日常生活の総ゆる面に檳榔が活かされている。

台湾の先住民族には、高砂族をはじめアミ族、パイワン族、ブヌン族等が台湾の中央山脈をはさんで、その南側、東側、あるいは山中にと分布しているが、いずれも檳榔の習慣があり、広東省から移住した漢族にも、檳榔の習慣があり、広東省の漢族に茶の習俗が届く以前か、平地で檳榔の習慣が定着していた人達の移住によるのではないかと思われる。



台湾の檳榔売り（台北市郊外）

現在の台湾には、檳榔の食習慣は消えつつあるが、近年になって、トラックの運転手の中には、檳榔を噛むことにより、眠気ざましになる、ということから再び人気が高まり、トラックの集まる所、あるいは交通の要所などに檳榔の売店が並ぶ様になった。

台湾に於ても、漢族、漢文化による茶の導入が、原住民族の檳榔にとって替りつつある様で、中国大陸の南部同様に、茶と檳榔とが接触しつつあり、檳榔に代わる茶がもたらす、文化変容に注目したいものである。

#### 東南アジア山地の茶と檳榔

##### (1) タイ国の茶と檳榔

タイ国北部山地は、自生茶もあるが、茶の山地に於ける茶樹は、大部分が中国からの伝播の様である。もともと、傣族には茶の栽培加工は無関係で、平地での稲作が主たる生業であった。それは、中国に於ける傣族系諸族や、ミャンマーのシャン族、インドのアッサム地方に於けるタイ族系のアホーム族、ヒマラヤ山地、アルナチャール・プラデッシュに於けるカンプチ族等には、伝統的な製茶及び喫茶の習慣は無かった。しかし、現在のミャンマーのシャン族には、製茶も見られるが、それは、主として北シャン州のパラウン族に触発されての茶造りといえるもので、本来的のものではない。また、アッサムのアホーム族にも現在は、紅茶産地としてのアッサムであり、茶とのかかわりは自然と持つことになって来たものである。

タイ族には、伝統的な嗜好として、檳榔があったわけで、それがタイ国の仏教により、茶への転化がなされたものと推測する。そして、檳榔子の食習慣に茶を応用することで、噛み茶が出来あがったものである。したがって、噛み茶の産地は、タイ北部の山間にあり、生産の主体はタイ族による、量産の技術体制となっており、大量少費のタイ族への供給となっている。

タイ国の茶史は、細部にわたるものは見られないが、その始まりは、タイ国東北部ナーン県に始まる様である。ナーン県には、今世紀になって、中国の雲南省勐腊県から瑶族が移住しており、瑶族による自生茶の利用が、タイ国の茶業の始まりではないか、と推測する。

「民族研究」新2巻第1号には「北部のナーン県の山中に住むティンヤ、東北部、西部に散住するカムクは上述の典型的な焼畑法で陸稲を作っている。…家の廻りには滅多に草木を栽培しないが、屢々山腹に噛み茶のミアングを栽培して米や塩に換える。…苗や瑤はこっ半世紀前からの若い移住者で、北緯17度以北のドン・バヤー・ニン山脈及び北部タイ東半の山上に5-6千人焼畑を行っている。」<sup>72)</sup>

いずれにしても、タイ国の茶については、漢文化によるものであることには、間違いないものと思う。

『暹羅説苑』<sup>73)</sup>には「暹羅人は食事前や食事中には決して茶湯や水を飲まないが、食後には必ず茶か水を飲む。其の茶は支那茶である。」とあり、タイ国産の茶では無いことを物語っている。現在では、タイ北部に噛み茶のミヤン造っており、チェンマイなどの市場で売られている。それは、タイ国北部の産地に住むメオ、カレン、アカー、ヤオ等の諸民族の経済開発であり、ケシに代る作物として茶が有望視されるが、土地茶といい栽培技術的にも問題は山積している様である<sup>74)</sup>。

前掲書<sup>75)</sup>に「暹羅人の中には檳榔を喫む風習があり、上下貴賤の別なく26時中之を口にし、行往坐臥、須臾も之と離れることはない。…南暹の人々が檳榔子を噛むやうに、北暹の人々は茶の葉を蒸して丸めたミャンといふものを嚼嚙する。ミャンは普通は野生の茶の葉から製するが、中には茶畑を作って居る地方もある。」タイ国の南部すなわち、タイ国の平野部の檳榔樹の育つ地方では、檳榔子を噛むという習慣のあることは、タイ族の人達には伝統的に檳榔があり、北方の山地民族の多い地方では、産地の茶を活かすことになったが、タイ族の伝統的嗜好料である、檳榔子の習慣が、茶に代ったものであることを物語っている。さらに、前掲<sup>76)</sup>には「…ミャンは茶を喫し檳榔子を噛むと同じ効果があるといふ…」檳榔子を噛むことによる、赤い唾液は口中を赤くし、見るからに人に不快感を当え、血を見ることを嫌う、タイ国の仏教徒には当然ながら、檳榔子に代るものとして、茶が用いられることになり、タイ国南部では飲む茶がそれに代って来たものである。

食べる茶で知られるミャンマーには、檳榔子を噛む習慣は、ミャンマー在住のインド人には見られるが、ミャンマーの人達には多く見かけなく、噛み茶が広く普及している。

茶産業として広く知られていない、ラオス人民共和国では、主要民族であるラオ族や、各種山地民の多くが、檳榔子の習慣が多く、これは、茶の普及の少ないことを物語っている。史林<sup>77)</sup>には、ラオス北部の瑶族の茶について「嗜好品に茶 Cha と阿片があり、茶は数葉を火にかざして焙じ、熱湯に入れて使用する。」とあり、瑶族の茶の利用には、中国でも屈指の名茶も造るが、こうした極めて初原的な製茶法をもって、茶を利用しているわけで、瑶族が原初製茶民であることを物語っている。

瑶族は、ラオスに限らず、ベトナム北部山地にも移住しており、ベトナムを代表する茶産地のイエンバイ省、さらに、中国の雲南省の河口県に近い、ラオカイ地方、ツエンカン、タイグエン地方等、瑶族の住む所に茶産地が集中しており、ベトナム人民共和国の主要茶産地となっている。

山地民族の瑶族には、茶の習慣があるが、ベトナム民族の多くは、檳榔子の習慣があり、カンボヂヤの人々にも檳榔子の習慣が、伝統的嗜好料となっている。嗜好料と共に人生儀礼、農耕儀礼にも檳榔が使われており、檳榔樹の自生する東南アジア諸国には、茶以前に檳榔が伝統的に活かされていたもので、中国から伝来した茶が、漢文化と共に檳榔に代る嗜好料となり、檳榔子の噛む形態をそのまま噛み茶とし、さらに、飲用茶として受容しており、東南アジア諸国の山地に於いて、漢文化としての茶と、檳榔子の習俗とが、接触し相互に変容しつつあるわけで、その結果についてさらに検討を加える必要がある。

このことは、東南アジア島嶼部諸国及び、太平洋諸国にも見られるわけで、広く茶と檳榔のかわりを文化接触、そして、その変容の結果を比較民俗的に見極めたいものである。

## おわりに

茶と檳榔の植物学的特性

茶樹は、中国南部の雲南省西双版纳傣族自治州を中心として、紅河哈尼族彝族自治州、そして、

文山苗族壮族自治等の山地に原産したものとされており、檳榔樹の原産地と見られる、マレーシアのペナン地方とか、東南アジア山地に於て、高地の茶樹、低地の檳榔樹と住み分けている。そして、その利用には、茶については、漢文化のもとに発展し、檳榔にあつては、東南アジア低地に住む各民族の文化として発展して来たものである。

期せずして、この両者は、化学成分として相互に共通したものをもっており、その効用に於ても略々共通している。と同時に異なる点もあるわけで、茶が葉を利用するのに對し、檳榔は果実であり、種実である。さらに、檳榔はそれを嚙んでおり、茶は煎出して液状にして飲む。嚙むと、飲むの異に加えて、檳榔には赤い唾液となり、それを吐きすてる。ここに最大の異が生じているわけで、檳榔の習俗が茶に変わるのも、ここに帰因している。

#### 民族文化としての茶と檳榔

茶が、漢文化として育つて来たが、茶樹の植物学的特性から、山地を適地としており、山地民族としての瑶族によって、主としてその利用法が創造されることになるが、漢族による仙薬思想などの接触により、触発されたものである。したがって、山地焼畑農耕民族文化と漢文化によって育てられ発展して来たものといえる。

一方檳榔は、平地あるいは山間の稲作農耕民族文化によって、育てられ発展して来たものではあるが、その効用などから、遠くヒマラヤ山中にまで伝播しており、茶との接点ともなっている。

しかし、茶はその形態は異つても、世界飲料として、万国共通に飲まれており、そこには化学成分としての「タンニン」、「カフェイン」が主要成分となり、文化的には「もてなし」の心が大きく作用している。檳榔にも、この化学的成分、もてなしの心には共通したものがあるわけだが、世界的嗜好料にまでは発展していない。それは、檳榔子の長所であり欠点でもある、赤い唾液によるものではないかと思う。

#### 茶の受容と変容

嚙み茶は、中国雲南省雲部山地に住む、布朗族による伝統食品であり、茶の文化としての一つの形態である。しかし、嚙み茶、食用茶としては、タイ国の北部にタイ族を主体として造られており、ミャンマーでは、北シャン州の山地にパラウン族によって造られ、主としてビルマ人によって食べられている。

タイ族は、主として平地稲作民族であり、檳榔樹の生育地に生活する民族であり、パラウン族は、モンクメール語族であつて、その故地はカンボジア地方にあり、これまた檳榔樹の生育地にある。本来的には檳榔とのかかわりの深い民族であつたはずであり、それが移動により、茶の文化、漢文化と接触し、茶を受容し檳榔からの変容の結果として、嚙み茶が生じたものである。逆に茶が、漢文化と共に南下して、中国南部まで発展し、茶のもつ文化圏の周辺部で、檳榔文化圏と接触、交差して出来たものが、嚙み茶ということが出来る。したがって、茶樹の原産地と嚙み茶は、直結したものでなく、嚙み茶の存在が、茶樹の原地を証明することにはならない。そこに

は、茶の文化に於ける民族及び民俗的に比較文化誌的な立場からの究明が必要であり、それと茶樹の生態との結びつきによって、茶の原産地も明かになることと思う。

茶樹の原産地、茶の文化の発祥地、そしてそこに住む民族の喫茶習俗等、中国の北と南、山地民族と平地民族、さらに、漢族と非漢族等の比較民俗について、多面的な調査研究が進むことによって、日・中の比較文化が、生活文化として広範にわたって、理解されることになるはずである。その一環として、茶と檳榔の関係と概括したものである。

### 参考資料

- 1 『広雅』諸岡存『茶経評釋』全出版科学総合研究所，昭和52年。
- 2 『華陽国志』常璩撰，顧贖折校，商務印書館，1958年
- 3 『茶経』陸羽，布目潮瀾『中国茶書全集』上，汲古書院，昭和63年
- 4 『蛮書』校注，樊綽撰，向達注，中華書局，1962年
- 5 『ティーロード』日本茶の伝来。松下智，雄山閣出版 平成5年
- 6 『土屋族風俗志』楊昌鑫編著，中央民族学院出版社，1989年
- 7 『瑶族簡史』瑶族簡史編写組，広西民族出版社，1983年
- 8 『黔东南苗族侗族自治州概况』黔东南苗族侗族自治州概况編写組，貴州人民出版社，1986年
- 9 『壮族簡史』壮族簡史編写組，広西人民出版社，1980年
- 10 『侗族簡史』侗族簡史編写組，貴州民族出版社，1985年
- 11 『仫佬族簡史』仫佬族簡史編写組，広西民族出版社，1983年
- 12 『哈尼族簡史』哈尼族簡史編写組，雲南人民出版社，1984年
- 13 『基諾族簡史』杜玉亭，雲南人民出版社，1985年
- 14 『拉祜族簡史』拉祜族編写組，雲南人民出版社，1986年
- 15 『布朗族簡史』布朗族簡史編写組，雲南人民出版社，1984年
- 16 『德昂族食風』魯克才主編，『中華民族飲食風俗大觀』世界知識出版社，1992年
- 17 『佧族簡史』佧族簡史編写組，雲南教育出版社，1985年
- 18 『熱帯の有用作物』熱帯農業技術叢書第9号，昭和50年
- 19 『檳榔と芭蕉』、『日本民族文化の起源』松本信廣，講談社，昭和53年
- 20 『中国食物史』篠田統，柴田書店，昭和49年
- 21 『中国の寺・日本の寺』鎌田茂雄，東方書店，1982年
- 22 『お歯黒の研究』原三正，人間の科学社，1982年
- 23 「東アジアの古代文化」特集，古代日本と東南アジア，1975年，大和書房
- 24 前掲 20
- 25 〃 〃
- 26 『古代中国の地方文化』W・エバーハルト著，白鳥芳郎監訳，六興出版，1987年

- 27『台湾の原住民族』宮本延人，六興出版，1987年
- 28 前掲 4
- 29『元江府志原稿』中国方志叢書，147，民国11年，成文出版社有限公司
- 30『鎮越県志』全，中国方志叢書，267，民国63年，成文出版社有限公司
- 31『寧洱縣輿圖』李熙齡編，咸豊1年（普洱府志，卷8，物産）
- 32『佛領印度支那』ア・アガール著，富島網男訳，修文館，昭和18年
- 33『印度支那民族誌』山名義鶴，大東亜出版株式会社，昭和19年
- 34『南方文化講座』民族と民族運動編，三省堂
- 35『小方壺齋輿地叢鈔，第9帙
- 36『太平洋の民族と文化』G・フィシャー著，小堀甚二訳，聖紀書房，昭和19年
- 37『セレベス民俗誌』青野謙次訳，小山書房，昭和19年
- 38『比律賓』南洋叢書5巻，満鉄経済調査局，慶応書房，昭和17年
- 39『蘭領東印度』南洋叢書第1巻，満鉄経済調査局，慶応書房，昭和17年
- 40「ブータンの人と暮らし」佐野賢治，中日新聞社，昭和58年12月14日
- 41『原色和漢薬国鑑』難波恒雄，保育社，昭和55年
- 42 前掲 41
- 43 前掲 41
- 44 前掲 18
- 45『新修支那省別全誌』第3巻雲南省，支那省別全誌刊行会，東亜同文会，大正6年
- 46 前掲 4
- 47『ティーロード』日本茶の伝来，松下智，雄山閣出版，平成5年
- 48『中国名茶の旅』松下智，淡交社，昭和63年
- 49『日知録』顧炎武，明末清初
- 50 前掲 47
- 51 前掲 17
- 52 前掲 12
- 53『布朗族社会歴史調査(3)』云南省編輯組，云南人民出版社，1986年
- 54『雲南少数民族』雲南省市史研究所，云南人民出版社，1980年
- 55 前掲 14
- 56 前掲 13
- 57『傣族社会歴史調査』（西双盤納之一）雲南民族出版社，1983年
- 58『三江侗族自治县概况』三江侗族自治县概况編写組，广西民俗出版社，1984年
- 59 前掲 47
- 60『仫佬風情』罗日澤，广西人民出版社，1985年
- 61『广西瑶族社会歴史調査』一，二，三，四，五，六，七，八，九期，广西壮族自治区編輯組，

廣西民俗出版社, 1984~1987年

- 62「民族研究」中国民族研究所, 中国民族出版社, 1989年, 1号  
63『廣西通志』卷89, 輿地略10, 物産  
64 前掲 48  
65『南越筆記』小方壺齋輿地叢書 第9帙  
66『粵遊小志』小方壺齋輿地叢書 第9帙  
67『新安縣志』上卷, 風俗, 中国方志叢書華南地方第1, 72号, 清嘉慶25年, 成文出版社  
68『廣寧縣志』中国方志叢書卷之12, 風俗志, 民国23年, 成文出版社  
69 前掲 48  
70『台湾番社考』小方壺齋輿地叢鈔, 第9帙  
71『臺灣に於ける食檳榔の風習』野谷昌俊, 人類学雑誌, 49卷4号, 昭和9年  
72「タイの原始農業」『民族研究』第2卷15号, 財団法人民族学協会, 昭和19年  
73『暹羅説苑』上卷, 松宮順, 南亜細亞文化研究所, 昭和17年  
74「タイ国の茶業」, 高屋茂雄, 「茶」1982年1月号  
75 前掲 73  
76 前掲 73  
77「北部ラオスの少数民族一特にヤオ族について」, 岩田慶治 史林43巻第1号, 1964年

#### 新刊紹介

巴莫阿依嫫・巴莫曲布嫫・巴莫烏薩嫫著

#### 『彝族風俗志』

民俗文庫という小振りの少数民族の民俗誌の16番目にあたる本書は四川省涼山で生まれ育った三姉妹が, 北京で民俗学, 言語学など学んだ後に, 故郷でのフィールドワークを踏まえて纏め上げた民俗誌である。彝族の民俗文化を世に紹介すること, 理論研究に耐え得る材料を提供すること, 彝族地区の経済文化発展の参考資料となることを意図したと後書にはある。内容は物質文化, 社会組織, 年中行事, 人生儀礼, 民間信仰, 口承文芸, 民間芸能となっていて, 各

章, 彝族を代表する民俗事例が選ばれている。虎トーテム, 宝貝をめぐる信仰, ピーモとよばれるシャーマン儀礼の諸相, 樹葬, 陶器葬, 岩葬, 水, 天, 土, 火葬という葬法の多様性など豊富な民俗が皆小出しでありながら, 小粒でピリリと辛い内容である。本格的な民俗誌の出版が待たれるのである。(佐野賢治)

B6判 234頁 中央民族学院出版部  
1992. 9月刊 4.30円